

# 流山市上貝塚貝塚・富士見台第Ⅱ遺跡出土の貝化石

— 縄文人の化石コレクション —

西野雅人

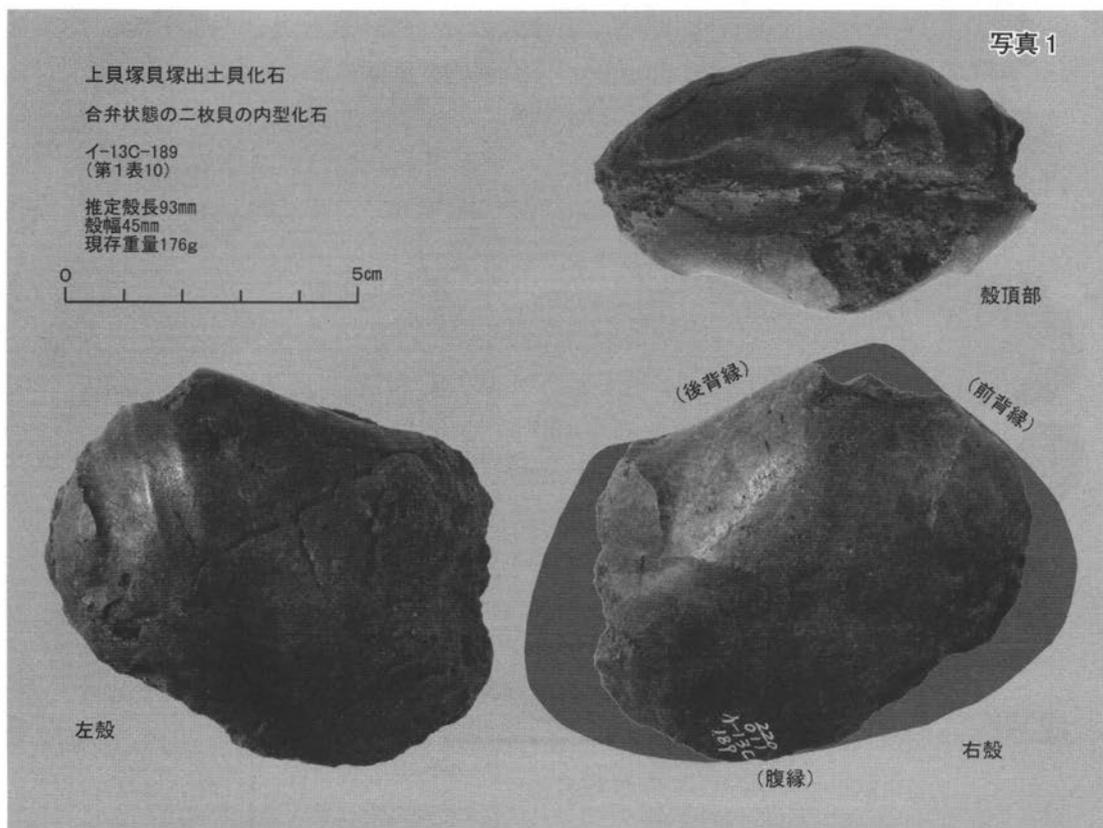
## 1 はじめに

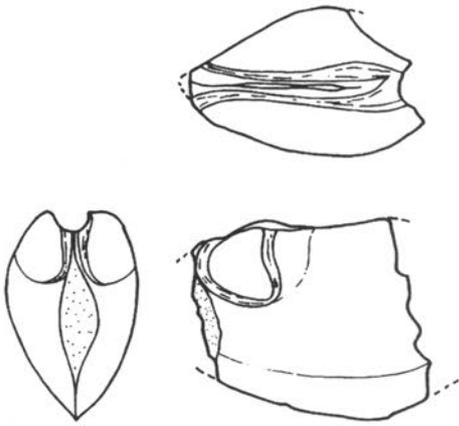
下の写真は、平成元年に行われた流山市上貝塚貝塚の発掘調査で出土した貝化石である。「モールド化石」と呼ばれるタイプで、貝殻は遺存せず、貝殻内部の空洞部分に入った土ないし泥が長い年月を経て固まったものである。すでに調査報告書は刊行されている<sup>1)</sup>が、貝化石は掲載されなかった。無理のないところである。一見、粘土を捏ねて焼き上げた土製品のようなものであるが、化石と判断し、人との関わりが想定できないならば、報告書には掲載しないのが普通だからである。

しかし、平成13年7月に実物を目にしたとき<sup>2)</sup>、どこかで似たものを見たことがあるという、おぼろげな記憶が二つ浮かんだ。一つの記憶は、よく似た色調の貝化石を含む土塊が崖から崩落していた、というものである。記憶は確かにあるのだが、いつどこで見たの

か結局わからないままである。

もう一つの記憶は、報告書で見たことがある、というものだった。そこで、自宅にある千葉県内の報告書を片っ端からめくっていった。ようやく見つけることができたのが第1図である。昭和58年刊行の流山市富士見台第Ⅱ遺跡の報告書<sup>3)</sup>所収の図である。やはり良く似ている。報告では「ハマグリ形土製品」とされ、縄文時代中期の住居跡から出土したという。この図が記憶に残ったのは、二枚貝類の貝殻内面にある蝶番の部分、閉殻筋痕（貝柱の付着痕跡）や套線（ヒモ状の部分の付着痕跡）が図に表わされていたからである。縄文人が果たしてこんなものまで表現するであろうか、と不思議に感じたのである。少し後から気づいたのだが、そもそも、通常は目に見えない内型の造形というのは、ほとんどあり得ないことだろう。





第1図 富士見台第Ⅱ遺跡報告書掲載の図<sup>3)</sup>

「ビーチコーミング」という言葉をご存じだろうか。海辺で漂着物を拾う作業なのだが、打ち上がるのは沿岸に存在するものだけではない。沖合から、山から、都会からと、さまざまところから流れ着く。また、生物から人工物まであらゆる種類のものが打ち上がる。その楽しみは多くの人に広がっており、趣味としてだけでなく、採集品の販売や芸術作品の制作、海を知り大事にする活動など積極的に利用されている<sup>4)</sup>。

ビーチコーミングは、長い歴史をもっている。縄文時代の初めには行われていたのである。縄文時代草創

期の愛媛県久万高原町上黒岩岩陰遺跡、長野県北相木村北栃原岩陰遺跡では、イモガイ、タカラガイ、ツノガイの装飾品が出土している。食用としてではなく、アクセサリーの素材として、海岸に打ち上げられた貝殻が採集され、内陸まで運ばれていたのである。縄文人が拾ったものは、貝殻だけに留まらない。貝塚などの遺跡を発掘すると、海岸や化石貝層など、海岸から拾ってきたとみられる、実にさまざまなものが出土するのだ。

今回取り上げる貝化石も、こうした縄文人の拾い物の一つとみられる。貝殻自体ではなく、貝の形をした土の塊にも興味をもったらしい。ただ、こうした珍品は一つだけ出土しても、縄文人が意識的に持ち込んだと決めつけることはできない。注目したのは、直接出土品を目にした上貝塚貝塚と、実測図を見つけた富士見台第Ⅱ遺跡が、流山市内のすぐ近くに位置しており、ほぼ同時期の集落遺跡であったことである。偶然のこととは考えにくく、追究してみる価値はありそうである。そこで、まず、上貝塚貝塚出土資料を観察するとともに、出土状況を調べて、貝化石が縄文時代に持ち込まれたのかどうかを検討してみることにした。



写真2

上貝塚貝塚 エー14A・B区  
多数の貝化石を含む土塊

## 2 上貝塚貝塚出土の貝化石と土塊

### (1) 資料の状態

写真1の貝化石の状態は、こげ茶色で光沢があり、化石といっても軟質で、砂利混じりの泥が、ある程度の年月を経て半ば固まった状況である。二枚貝の殻の内面圧痕が明瞭にプリントされており、殻自体は完全に失われている。

保管資料のなかには、これによく似た質感の土塊<sup>5)</sup>も多数取り上げられていた。小片を除くと68点ある(第1表)。写真2は、そのうち、エ-14A・B区から集中して出土したものである。ほぼ全部に貝殻の痕跡があるので、貝殻の形をした化石が持ち込まれたことと一連のものと考えざるを得ない。土と貝の割合を、貝塚の調査の表現に例えてみると「混土貝層」という程度で、多量の貝殻を包含する地層に由来するものと推定される。殻の外側の平滑な面がプリントされた部分は、写真1の資料ほどではないが光沢をもっている。貝の種類は二枚貝がいくつもみられる。巻貝は見当たらない。二枚貝では、左右の殻が合わさった合弁状態のものは少ない。写真1(第1表10)と第1表26の2点であり、貝種は同一とみられる。貝殻の外側の痕の付いたもの(メス型)と内面圧痕が付いたもの(オス型)を比べると、外面の方がかなり多い点に注目しておく。

### (2) 出土状況と時期の推定

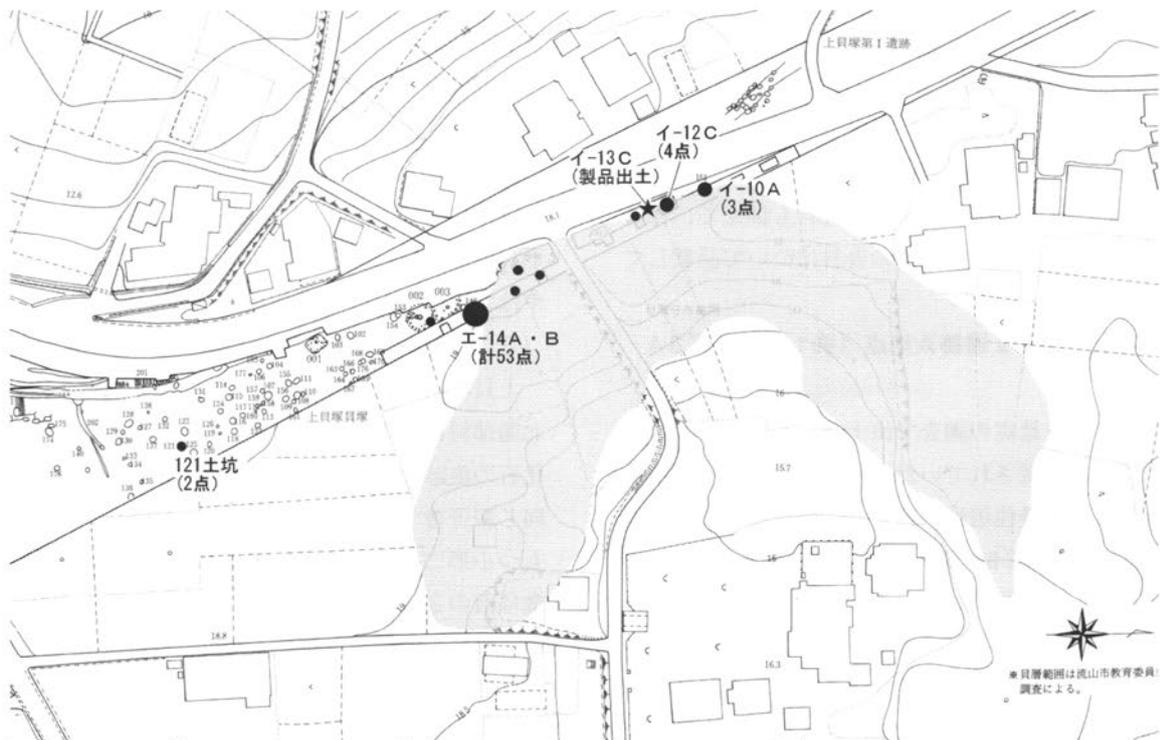
第2図<sup>6)</sup>のように、貝化石を含む土塊は、縄文後期の面状貝層の外縁部付近から出土している。台地北端部の斜面の肩付近に当たる。全部で68点のうち、確実に遺構から出土したのは、121号土坑出土の2点であり、遺構の時期は後期初頭から前葉の称名寺式終末期～堀之内1式成立段階である。

遺構外から出土したものでは、その大半の53点がエ-14A・B区の2m×4mの調査区から出土している(第3図)。この範囲から出土した土器は、中期後葉・加曾利EIV式から晩期までの幅をもつが、ある程度破片が接合するのは堀之内1式に限られている。貝化石を含む土塊は、概ねこの時期の包含層に伴うものとみてよいであろう。

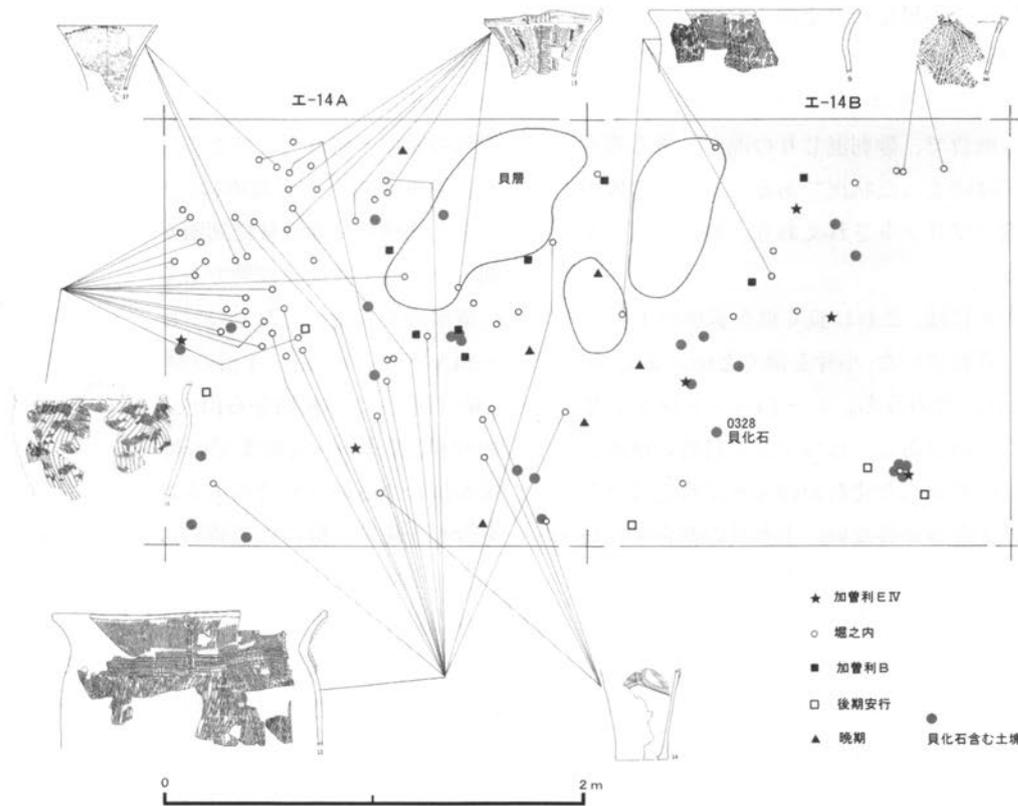
貝化石とそれを含む土塊が持ち込まれた時期は後期初頭～前葉と推定される。

### (3) 貝化石を含む土塊が持ち込まれた理由

以上の所見から、貝化石とそれを含む土塊は、縄文人が、それを採集して集落内に持ち込み、打ち割るなどして中から貝の形をした化石を取り出したもの、とみることができるだろう。内面の痕が付いたものが少ないのは、貝殻の形をしたものが、外部に持ち出されたことを意味すると思われる。つまり、縄文人は、今でいうところの化石のクリーニングのような作業を集落で行っていたのである。



第2図 上貝塚貝塚貝化石出土状況(1) 註1文献の図を改変



第3図 上貝塚貝塚貝化石出土状況(2) 註1文献の図を改変

### 3 出土例

貝化石は、縄文人が積極的に入手したものではないかという考えをもつに至って、流山市教育委員会の小栗信一郎さんと小川勝和さんに連絡をとった。富士見台第Ⅱ遺跡から出土した第1図の資料の見学のお願いととも、この近くの遺跡から同様の資料が出土していないかどうか、問い合わせてみたのである。すると、早速、見学の了解と、ほかにも事例が見つかったというお返事をいただいた。調べてみて良かったと思った瞬間である。そこで、流山市保管資料も併せて、今のところ見つかっているすべての資料について記載しておきたい。

#### (1) 富士見台第Ⅱ遺跡A地点(第1図、写真3A・3E-c)

昭和56年のA地点の調査で出土し、第1図に示した図が報告書に掲載されていた資料である。出土した場所はA地点第1号住居址の覆土上層で、遺構の時期は中期中葉・加曾利EⅡ式期である。現存最大幅は86mm、推定殻長90mm、殻幅は46mmである。全体の形状・大きさ・色調や、殻の各部位の形態は上貝塚貝塚出土資料に酷似する。おそらく同一種であろう。確かにハマグリに似ているが、現生種や上総層群の貝種には見られないようであり、今のところ種は不明である。なお、

報告書では丹塗りとされていたが、自然の鉄分による発色とみられる。

#### (2) 富士見台第Ⅱ遺跡F地点(写真3B、3E-a)

同遺跡では、平成17年に発掘調査が行われたF地点でもさらに1点、同様の貝化石が出土した<sup>7)</sup>。出土した場所はF地点SI07住居跡で、遺構の時期は中期中葉と後葉の境界・加曾利EⅡ式末～EⅢ式期初頭である。A地点第1号住居址との距離は40mしか離れていない。現存最大幅は86mm、推定殻長約70mm～80mm、殻幅は38mmである。前の2点よりやや小ぶりだが、全体の形状や、殻の各部位の形態は上記2点に酷似しており、やはり同一種であろう。

#### (3) 三輪野山第Ⅱ遺跡(写真3C)

上貝塚貝塚と同じ遺跡群に属し、平成元年に台地の北端部斜面を調査している。古墳時代の住居跡から貝化石の痕跡をもつ土塊が1点出土した。上貝塚貝塚と同じ報告書でやはり非掲載となっていた。強い輪肋をもつ小形二枚貝の外表面圧痕が複数みられる。土塊の特徴は前の3点とよく似ている。出土した場所は、台地の北縁部で4軒が重複して検出された古墳時代の堅穴住居(004A～D)のいずれかである。その覆土中からは、70点の称名寺式土器が出土していることが報告書に明記されている。後期の土器の分布はこの範囲に

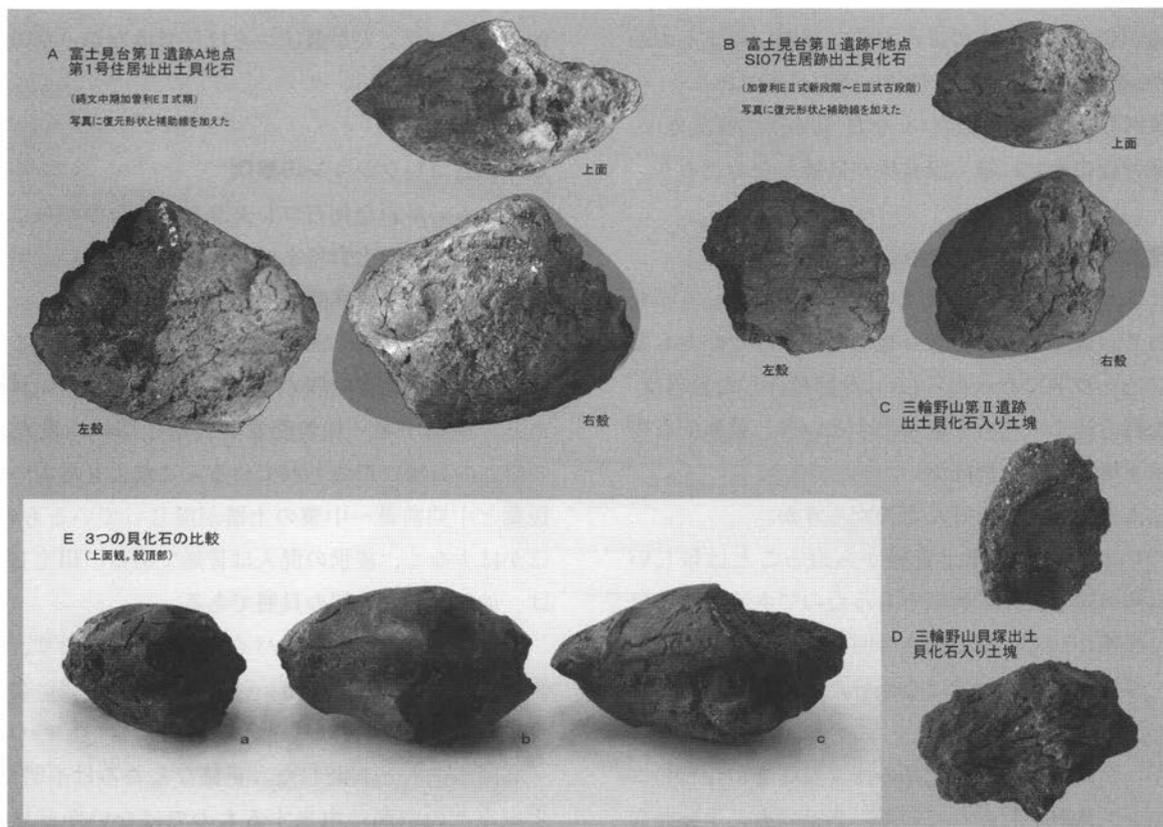


写真3 (A・B・D・E-a・cは流山市教育委員会提供)

限定されており、土塊は、後期初頭の土器に伴うものであろう。

#### (4) 三輪野山貝塚 (写真3D)

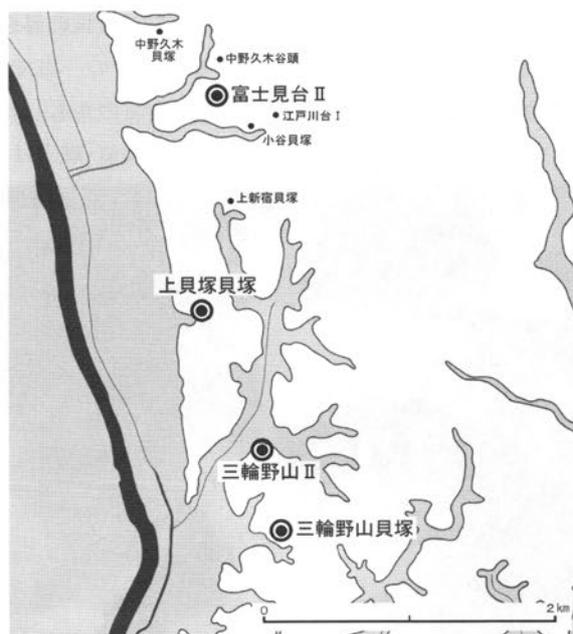
後晩期の環状盛土遺構を伴う拠点集落であり、区画整理事業に伴う調査が平成2年度から断続的に行われている<sup>8)</sup>。貝化石の痕跡をもつ土塊1点が、南西斜面部の第8地点-4、C区(MMS8-4C)から出土している。やはり質感は同様に、小石が混じり、鉄分の付着がみられる。なお、同遺跡の調査で貝化石自体も出土している可能性が高いという<sup>9)</sup>。

### 4 出土遺跡と年代

貝化石またはそれを含む土塊が出土した4遺跡の位置を第4図に示した。北端の富士見台第II遺跡と南端の三輪野山貝塚の間でも3kmと、ごく狭い範囲内である。年代は、中期中葉・加曾利EⅡ式～後期前葉・堀之内式期の間に絞られる。今のところ中期の例は少ないが、住居跡の覆土から出土しているので、存在を認めてよいであろう。中期中葉は東京湾東岸湾奥部に大型貝塚・環状集落が形成された時期に当たり、中期後葉の大型貝塚形成の断絶期を経て、後期前葉には大型貝塚・環状集落が再び形成される。貝化石と土塊の年代は、断絶期を挟んで、中期と後期の両方の時期に跨っ

ているといえる。

一時的とはいえ、この地域で貝化石を取り出す作業が流行したらしい。ただし、この地域内では、発見された資料は氷山の一角であるかもしれない。今のところ、ほかの地域では出土した情報がないので、狭い範囲で一時的に流行したとみておきたい。ただし、日常的



第4図 貝化石等出土遺跡

に交通が想定されるこのような狭い範囲に収まるのかどうか、結論を出すのはもう少し待つべきであろう。今後の類例の増加に期待したい。なお、化石等の採集地は、上貝塚付近に南北に続く浸食崖が候補となるだろう。

## 5 縄文人の化石コレクション

最初にも触れたが、縄文人は多種多様な拾いものをしており、海岸と化石を含む地層の崖下などがおもな採集フィールドであったらしい。今回紹介した資料は、土塊を持ち込んで化石を取り出すという、積極的な姿勢を示す事例として興味深い。

縄文人はなぜ化石を好んだのだろうか。

こういった問題に出土資料から迫ることは難しいが、自然の造形自体に興味をもったのであろうことは容易に想像がつく。ただし、今回の資料を見て思ったのは、きっとそれだけではなかったのだろう、ということである。

近年、全国各地の自然史系の博物館等で、化石のクリーニング体験が行われている。当県でも、千葉県立中央博物館で実施されており、子供たちの人気を集めている。写真4は、平成14年8月に家族で参加させていただいたとき撮影したもので、鑑定結果を心配そうに待っている光景である。化石は売店で購入することもできるが、発見の喜び、きれいに取り出せた時の喜び、逆にうまくいかなかった時の落胆などがあるからこそ、子供たちは夢中になるのだろう。流山の縄文人が、わざわざ土塊を集落に持ち込んできて化石を取り出しているのは、きっとそうした楽しみがあったからだと思う。茶色くてピカピカな、大きな二枚貝の形をした化石は“お宝”だったに違いない。その一方で、流行が拡大しなかった理由も、そこにあるのかもしれない。つまり、取り出されたもの自体の価値・魅力は、



写真4 「お宝発見か」

他の地域の縄文人が飛びつくほどではなかったのではないか。

## 6 化石コレクションの事例

縄文人の多彩な化石コレクションのなかから、千葉市有吉北貝塚出土資料をいくつか紹介したい。

### (1) 彩色された高師小僧

北斜面貝層・II-58区G層から出土した<sup>10)</sup>。この貝層は、壺状の地形を埋めるように堆積した厚い貝層であり、中期中葉・加曾利E II式期の間に、最大3.5mの厚さの貝層が形成されている。これよりも古い前期後葉と中期前葉～中葉の土器が混じっているものの、ほかは少なく、後世の混入は皆無である。出土した層は、加曾利E II式期の貝層である。

写真5のように中空のパイプ状になっており、一見金属加工品のようである。硬質で、叩くと鈍い金属音がする。土中の鉄分が自然に固まったもの、いわゆる「高師小僧」と判断した。正確なところは不明だが、生痕などの空洞に由来するものではないかと思われる。外面から、パイプ状の部分の内面にかけて赤色顔料が塗られている。硬く不思議な造形が興味を惹いたのではないか。約4700年前の縄文人と金属の偶然の出会いということになる。

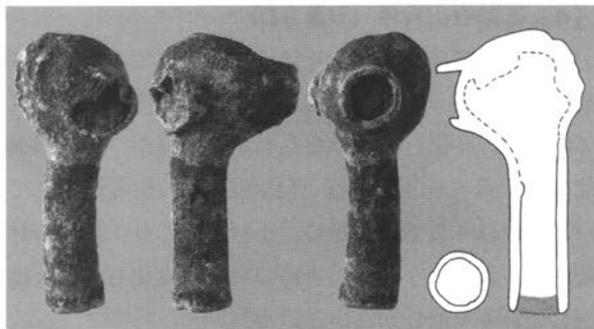


写真5 (縮尺1:4)

### (2) 高師小僧の垂飾

北斜面貝層の壺状の地形は、縄文時代に崖崩れをおこして形成されたらしく、地下の土層に含まれる高師小僧が多量に出土した。写真6は、1か所に孔が開いており、何人かの目で検討した結果、人為的に穿孔された可能性が高いと判断した。縄文人は実に様々なものに孔を開けてアクセサリーにしているが、これも珍品のひとつである。やはり加曾利E II式期の層 (II-52区F 8層) から出土している。

### (3) ノジュール製小型石棒

写真7の3点は、棒状の石であり、形状や質感が似

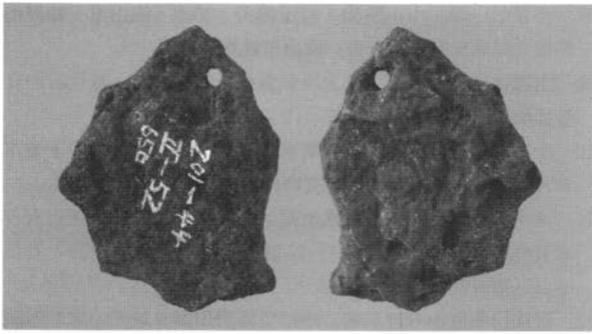


写真6 (長さ9cm)

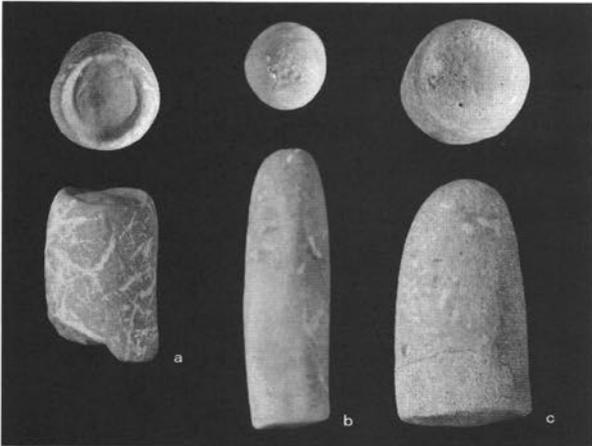


写真7

ている。みな欠損して長さは不明だが、径は左から31mm、24mm、37mmである。bの先端は敲打痕をもつ。もう17年も前のことであるが、報告書に掲載する必要があるかどうか、筆者自身困った覚えがある。その後、他の職員に整理作業を引き継いだが、筆者が掲載の対象から除外してしまったように思う。棒状に加工したものか、このような形のを拾ってきたのか判断できなかつたし、aは型に粘土を流し込んで作った近世以降の泥人形のようにも見えた。出土位置は3点とも、南斜面貝層の台地側の縁辺であったが、この場所は古墳後期の住居跡が近接しており、斜面貝層には古墳時代から近世までの混入が認められた。時代・材質・性格とも見当がつかかなかつたのである。この後刊行された同遺跡の古墳時代以降編で岸本雅人さんが掲載してくれたことは幸いであつた<sup>11)</sup>。

ところが、平成16年、千葉県立上総博物館にこれとよく似た遺物がたくさん保管されていることを知つたのである。木更津市祇園貝塚の出土品である<sup>12)</sup>。縄文時代中期中葉の大型貝塚を伴う拠点集落であり、土器もこの時期のものが圧倒的に多い。

石材は凝灰岩または砂岩で、おそらく生物や生痕に由来するノジュールと呼ばれるものであろう。海岸で

水摩を受けて棒状になったものを素材としている。祇園貝塚出土品をみると、目立った加工はされないものの、先端の加工によって明らかに男性の生殖器を表現しているものが含まれる。小型の石棒であつたのだろう。また、先端には使用痕とみられる敲打の痕をもつものが複数存在することを確認した。先端を打ちつけるような儀礼に使われたのではないか。また、石棒の形をしたものが海岸に落ちていること自体が特別視された可能性が高い。

有吉北貝塚出土の3点も、形状や質感が酷似しており、中期中葉の貝層から出土したことからすれば年代も同じである。同様の資料であることはほぼ間違いのないところであろう。写真7 aは亀頭が少し露出した状態を表現している可能性が高い。

さらに、同様の資料は千葉市加曾利南貝塚からも出土している。資料を観察したのは昨年亡くなられた後藤和民さんで、「混貝土層中より、堀之内Ⅱ式、加曾利BIおよびⅡ式の土器片とともに出土した。酸性凝灰岩製のため、いたって軽く、もろい。頭部側面に輪脈のせまい貝化石の痕が残っており、その部分から一部剥落しているが、元来頭部は不整形、胴部との区別も横に1本の細い沈線が施されているだけで、太さも変わらず、断面はほぼ正円形を呈する。」と詳しく記載されている<sup>13)</sup>。明らかな加工は沈線一本であるが、巧みに亀頭部を表現している。

富津以南の岩礁海岸では、このようなノジュールを採集可能であり、祇園貝塚からはほかにも、イタボガキ、ツノガイ、イモガイ類、タカラガイ類などが数多く採集されている。中期に流行したアクセサリーの素材の内、富津以南の海岸で採集できる素材の流通には、祇園貝塚の人々が強く関わっていた可能性がある。

このように、縄文時代には食糧以外の物資も流通経済の一端を担っていたわけだが、流山の貝化石は流通した形跡がないことから、経済活動にはあまり関わらなかつた可能性が高い。縄文人の価値観が、経済的にはあまり魅力のないものにも向いていたことを教えてくれるのである。

最後になりましたが、流山市教育委員会所蔵資料の観察・撮影にあたり、同教育委員会小栗信一郎氏、小川勝和氏、加藤建設石川博行氏、早稲田大学樋泉岳二氏にお世話になりました。記して感謝の意を表します。

註

- 1 岡田光弘・落合章雄・糸川道行 1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財センター
- 2 平成13年7月、報告書刊行後に実施している保管・活用のための分類作業を当財団中央調査事務所で実施していた際、作業にあっていた米倉弘子さんから「貝の土製品が出ている」と教えていただいたことがきっかけになった。
- 3 小沢 洋・津田芳男 1983『千葉県流山市富士見台第Ⅱ遺跡』流山市遺跡調査会。第28図に実測図が掲載されている。流山市教育委員会において実物を観察した。
- 4 池田 等2005『ビーチコーミング学』東京書籍に詳しい。
- 5 正確には未固結の堆積岩であり、本来は岩塊と呼ぶべきかもしれない。
- 6 前掲註1文献。報告書第67図では002と003のキャプションが逆になっている。第3図は修正してある。
- 7 石川博行・増崎勝仁他 2006『千葉県流山市富士見台第Ⅱ遺跡F地点発掘調査報告書』加藤建設株式会社。貝化石は報告書非掲載。樋泉岳二氏・石川博行氏のご教示により、流山市教育委員会において実物を拝見した。

- 8 小栗信一郎・小川勝和・宮川博司 2008『流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書』流山市教育委員会
- 9 土塊は流山市教育委員会所蔵資料を実見した。貝化石の存在は小栗信一郎さんのご教示による。
- 10 小笠原永隆他 1998『千葉東南部ニュータウン19 千葉市有吉北貝塚1 (旧石器・縄文時代)』に所収(第360図)。
- 11 岸本雅人 1998『千葉東南部ニュータウン20 千葉市有吉北貝塚2 (古墳時代以降)』に遺構外のその他の遺物として所収(第217図・図版76)。
- 12 平成14年度から17年度にかけて博物館ボランティアで収蔵庫の整理と祇園貝塚の出土・採集資料の整理作業を進めた。その成果は、平成17年2月～3月に実施した収蔵展「祇園貝塚」に結実したが、報告書刊行には至らず、今後の課題である。なお、同博物館は閉館し、祇園貝塚の資料は木更津市郷土博物館金のすずに引き継がれた。
- 13 後藤和民 1986『加曾利南貝塚の特殊石製品』「加曾利南貝塚」所収。第58図6

第1表 貝化石等一覧

上貝塚貝塚 (財千葉県教育振興財団保管)				
No.	遺構・グリッド	遺物No.	備 考	写真
	121土坑	2点	称名寺Ⅱ式伴う土坑	
1	121土坑	1	2種類の二枚貝外面圧痕	
2	121土坑	1	貝化石ないが状態はほかと似る	
	イ-10A	3点	ブロック貝層・包含層。後期安行主称名寺・堀之内多	
3	イ-10A	207	シジミ状の外面圧痕	
4	イ-10A	345	ホタテ状、輪筋強い大きな二枚貝外面圧痕	
5	イ-10A	378	貝化石含まず、やや状態の異なる高師小僧	
	イ-12C	4点	ブロック貝層と包含層。称名寺Ⅱ主体。後期安行多	
6	イ-12C	1	数種類の二枚貝外面圧痕	
7	イ-12C	1	二枚貝外面圧痕	
8	イ-12C	1	二枚貝外面圧痕	
9	イ-12C	1	二枚貝外面圧痕	
	イ-13C	1点	貝層に近い包含層。称名寺Ⅱ・堀之内1主体	
10	イ-13C	189	合弁二枚貝内面圧痕化石。完形に近く光沢もつ	1
	イ-14D	1点	包含層。堀之内1あり	
11	イ-14D	204	二枚貝外面圧痕	
	エ-10D	1点	貝層(堀之内1式か)上面	
12	エ-10D	20	二枚貝外面圧痕	
	エ-12A	1点	貝層・包含層。堀之内1式	
13	エ-12A	1	二枚貝外面圧痕	
	エ-14A	42点	貝層・包含層。堀之内1式	2
14	エ-14A	2	二枚貝外面圧痕	
15	エ-14A	2	二枚貝外面圧痕	
16	エ-14A	140	二枚貝外面圧痕	
17	エ-14A	165	二枚貝外面圧痕	
18	エ-14A	239	二枚貝圧痕	
19	エ-14A	240	二枚貝圧痕	
20	エ-14A	269	二枚貝内面圧痕	
21	エ-14A	269	二枚貝内面圧痕。合弁か	
22	エ-14A	269	2種類の二枚貝外面圧痕。他の圧痕	
23	エ-14A	273	二枚貝圧痕	
24	エ-14A	289	数種類の二枚貝外面圧痕	
25	エ-14A	290	二枚貝内・外面圧痕それぞれ複数	
26	エ-14A	328	合弁二枚貝内面圧痕化石、一部欠損。10と同一種か	
27	エ-14A	334	二枚貝内・外面圧痕	
28	エ-14A	336	数種類の二枚貝外面圧痕	
29	エ-14A	336	二枚貝内・外面圧痕	
30	エ-14A	337	二枚貝圧痕	
31	エ-14A	338	二枚貝内圧痕	
32	エ-14A	393	二枚貝内・外面圧痕	
33	エ-14A	393	二枚貝内・外面圧痕それぞれ複数	

No.	遺構・グリッド	遺物No.	備 考	写真
34	エ-14A	-	二枚貝内・外面圧痕	
35	エ-14A	-	二枚貝内・外面圧痕	
36	エ-14A	-	二枚貝外面圧痕	
37	エ-14A	-	二枚貝外面圧痕	
38	エ-14A	-	二枚貝外面圧痕	
39	エ-14A	-	二枚貝内面圧痕	
40	エ-14A	-	二枚貝内面圧痕	
41	エ-14A	-	二枚貝?圧痕	
42	エ-14A	-	不明圧痕	
	エ-14B	11点	貝層・包含層。堀之内1式	
43	エ-14B	134	二枚貝外面圧痕数種類と貝以外の圧痕	
44	エ-14B	183	全体磨滅	
45	エ-14B	279	二枚貝内・外面圧痕と貝以外の圧痕	
46	エ-14B	279	二枚貝外面圧痕	
47	エ-14B	279	二枚貝内・外面圧痕	
48	エ-14B	279	二枚貝内・外面圧痕	
49	エ-14B	315	二枚貝内・外面圧痕	
50	エ-14B	327	圧痕なし	
51	エ-14B	333	二枚貝外面圧痕	
52	エ-14B	334	二枚貝内・外面圧痕それぞれ複数	
53	エ-14B	357	二枚貝外面圧痕	
	エ-21A	1点	土器少ない。前期と堀之内	
54	エ-21A	19	二枚貝内面圧痕?	
	オ-21B	1点	土器少ない。加EⅣ・称名寺	
55	オ-21B	1	二枚貝内・外面圧痕数種類と貝以外の圧痕	

富士見台第Ⅱ遺跡A地点 (流山市教育委員会蔵)

No.	遺構・グリッド	遺物No.	備 考	写真
1	第1号住居址		合弁二枚貝内面圧痕。一部欠。覆土上層出土	3A,3E-c

富士見台第Ⅱ遺跡F地点 (流山市教育委員会蔵)

No.	遺構・グリッド	遺物No.	備 考	写真
1	S I 07		合弁二枚貝内面圧痕化石。一部欠損	3B,3E-a

三輪野山第Ⅱ遺跡 (財)千葉県教育振興財団保管)

No.	遺構・グリッド	遺物No.	備 考	写真
1	004住居跡	534	貝化石入土塊。古墳住居出土。称名寺式土器	3C

三輪野山貝塚 (流山市教育委員会蔵)

No.	遺構・グリッド	遺物No.	備 考	写真
1	8地点4 C区		貝化石入土塊	3D